

イチモンジチョウとの初めての出会いは、サカハチチョウの項で書いた中学1年のときの科学班企画高知市鏡村川口への昆虫採集行だったはずだが、サカハチチョウの印象が強すぎて、残念ながらイチモンジチョウを初めて目にした瞬間の記憶がない。しかし、黒地にきりっとした白色の一字模様が映えるこのチョウは今でも好きなチョウで、とりわけ近縁種のアサマイチモンジとどこに差異があるのかと、ずいぶん熱心に両者を捕らえては比較した種だ。

大学生となってからチョウと接する時間が極端に減ってしまうが、それでも土日の天気の良い日には自転車を駆って京都市内を巡り、特に、比叡山の登山口となる修学院音羽谷へはよく通った。そこにはイチモンジチョウとアサマイチモンジとが混棲していて、そのおかげで両種をまちがいなく区別できるようになった貴重な産地であった。また、谷あい斜面には大きなアワブキがあってスミナガシの絶好の発生場所となっており、四季を通じてキタキチョウの季節型をフォローするのもいい環境が保たれていた。ところが、この谷あいの一角がどこかの裕福な個人の私有地だったとはとても信じられないが、ある日、このアワブキがいきなりでかいブルドーザーによって取り除かれる場面にでくわして驚く。結局、アワブキのあった谷あい斜面が広く切り開かれて、谷の自然流の一部を庭景観として採用した一見風流な私邸が建造され、筆者にとってチョウ観察の場として重宝した場所は消え去ってしまった。

イチモンジチョウはガマズミなどの白い花の蜜を吸う光景も目にするが、多くの場合、林道のやや開けた場所で路面の水分を吸う姿に出会う。2004年8月25日、開田高原のとある林道では、止めたHONDA Stream車の屋根の上で、そこに水分があるようには見えないのにゆっくりと羽を広げて口吻をのばす様子をいろんな角度でカメラ撮影を楽しんだ。撮影記録をじっくり眺めると、灼熱のアスファルト道路でよくみる陽炎状に屋根表面にもわずかな水分の層ができていて、その水分を吸っていたのだと思える。ときには路傍のクマザサの葉上に移動して休憩し、あるいは路面にまでおりて石の上で日向ぼっこの姿勢をとるなど、このイチモンジチョウは長い時間、筆者のカメラタイムのいい被写体となって遊んでくれた。石の上で日向ぼっこをするイチモンジチョウが自身の大きな影に気きづいているとしたら、いったいどんな心境なのだろうか。

